

川へのけ、鐵炮に當り候者と鎧合せ首捕りたり。青木頼母存知候。又越中小出之城を景勝被攻、初而町を破りし時、門口にて鎧を合せ、我等鎧突折候。其日の心懸、景勝内河田忠兵衛、嶋津左兵衛見吳候へども、兩人共相果候。又越後柴田因幡、景勝へ敵たい仕時、八幡と申所にて合戦有之、首一つ捕る。景勝内小倉民部、山先五右衛門存知候。又柴田之地落城之時、於本丸山中と申者討捕る。景勝内西村兵部大肥傳右衛門存知候。又武藏八王寺之城寶之時、首捕候。景勝内須田七太夫、返部惣次郎存知候。又出羽の仙北御檢地之刻、大谷刑部少輔家來原田又右衛門と申仁と、我等高寺と申所に罷有、一揆起り候に付高寺をのき候處、高寺孫十郎乗かゝり、原田又右衛門を馬より突落し候處を、我等横馬を入候て又右衛門を助け候。刑部殿被聞召、拙者被召寄、道服を被下。景勝内岩井備中被存候。とあり。右原采女の子孫絶えたるか、今其の子孫なしと云ふ。

○大橋新左衛門傳話

新左衛門は、本多安房守政重の家士、家祿百石にて武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。新左衛門、本國越前。

初上杉^{景勝}三郎殿に罷有、景勝と景虎との弓矢に相成、六月朔日に善光寺表にて首一つ捕りたり。翌二日に八幡表にて北條丹波打死の刻も、首一つ討取り、其翌三日にも首一つ捕りたり。兩日の走廻り高名仕に付、景勝より感状を被吳。此様子は越後に罷在坂井九郎兵衛と申者存知居候也。又同弓矢之内鎧合候事三度。一度は春日山土居下にて江を隔つる也。一度は右之口のすゑ、是も江を隔て、なり。一度は大は繩手にて也。如此走廻り候付、加増被吳候。是も右坂井九郎兵衛存知居候。又越後三條神保小次郎所に罷有時分、首三つ捕りたり。一つは景勝爲武見罷出、風間と申者を討捕候へば、景勝陣所へ夜討に出候付て、町曲輪破り候時、討取りたり。此段信濃に罷在る今泉與助と申者存知居候。又上條入道方に罷有候時、越中小出之城を景勝被攻申候。致夜懸、生捕登人、小出之城攻口堀之淺みを背より見候て、我等案内仕り、上條は最前にて乗取申候。此様子上總様に罷有、左右と申兵法つかひ能存知居候。と大橋新左衛門自分に書載せたり。按ずるに、右上杉三郎殿といへるは景虎が事也。藩翰譜に、上杉謙信元龜元年の春日北條左京

大夫氏康、七歳の三郎を人質となし越後へ送る。謙信我が子にすべしとて、天正元年正月上杉三郎景虎と名乗らせ、外甥景勝が妹に娶せけり。謙信卒する時領國どもを二分に分ち、景虎と外甥の長尾喜平次景勝に譲る。謙信卒して百日を歴ずして、景虎・景勝五に國を争ふ。同年四月廿日軍起り、景虎打負けて春日山の城を去り、上杉憲政の御館喜歌川へ落行き、景勝が方人せし家子郎等、爰かしこの城々に櫓籠りて戦ひ止む事なし。天正七年正月晦日景虎が頼み切りたる侍大將北條丹後守討たれしかば、景虎御館にもたまりかね、同三月鮫が尾の城に落行き、爰をも同じく攻落され、景虎腹切つて死すとあり。右争戦の頃武功を顯したる趣をば、前顯高名書に書載せたるもの也。北條丹波は丹後の寫し誤りなるべし。又上條入道方に居たる時、越中小出城を攻め高名せし時の事は、同本多安房守家士原采女之武功書にも、越中小出之城を景勝被攻、初て町を破候時、門口にて鎧を合せ、我等鎧突折候。其日之心懸景勝内河田忠三衛・嶋津左兵衛見吳申。とあり。三州志故墟考に、小出城。廢城考作小井手。在越中國新川郡下條郷小出村領。平

地也。天正八年佐々成政の部將久世但馬居す。九年神保・佐々等信長公の馬揃に各上京する處、其躰を伺ひ、三月六日河田豊前松倉城に於て調略を以て越後より長尾喜平次景勝を呼び越し大將となし、同月九日に小出城を圍む。此の事同月十五日朝信長公松原馬場にて聞き給ひ、即ち先鋒として越前衆不敵・前田・原・金森・柴田等に暇を賜ひ、夜を日に繼ぎて越中へ馳せ往き、同月廿四日佐々成政六渡寺川を越え、中郡の中田へ馳着^ゆけば、長尾喜平次・河田豊前小出を引拂ひ、成願寺川・小出川を越え人數を引入る、由、太田和泉守日記に見ゆといへり。前顯武功書共に載せたる越中小出城にての戦功を顯したるは、此の時の事也。さて大橋新左衛門が子孫は世々連綿し、馬場町に居住せしかど、子孫大橋貞篤其の地を退去すと云ふ。

○樋口惣左衛門傳話

惣左衛門は、本多安房守政重の家士、家祿百五十石、武功の士なり。元和二年の武功書に云ふ。樋口惣左衛門、本國上野。北上野あそ野より出候小淵勘助と申者を討捕り、只今本多大馬に罷有小詰大學存知候。又伊豆之蘆山へ在番に